

人権なら

2017年3月1日

第75号

● ひと・まち・生き生き

NPO なら人権情報センター

大震災・原発事故から6年

「3・11」を風化させてはいけない

2011年3月11日の東日本大震災と、それに伴う福島原発事故から6年が経つ。テレビ画面越しに見た、あの日の光景と衝撃は忘れられない。尊い命や多くのものが一瞬にして奪われた。被災者はどのような思いでこれまで暮らしてきたのだろうか。復興の進捗状況もほとんど伝わってこない。復興をめぐる、対立や格差が生まれ、人と人とのつながりが失われている、という。それが被災地からの人口流出やコミュニティの解体をもたらしているようだ。

人々から家も仕事も故郷も奪った福島原発事故。未だに収束の見通しは立たない。放射能汚染水は漏れ続けている。放射性廃棄物は処理できないままだ。事故現場は作業員約7000人が被曝しながら支えている。子どもの甲状腺がん患者は185人に達した。様々な健康被害も出ている。避難者は今も9万人に及ぶ。避難している子どもたちへのいじめも頻発。このままだと、避難者へのバッシングがさらに強まる。偏見が差別言動となって現れてくる。災害に遭い、さらに人災に遭うことがあってはならない。

避難者への帰還圧力を強める政府・福島県

放射能の被害を逃れるため、避難した人たちに対する帰還圧力が高まっている。政府や福島県は避難指示区域外から避難している自主避難者に対する住宅の無償提供を3月末で打ち切る。原発事故・震災で故郷を失い、再び住む家を奪われる。避難者は「帰還」か「定住」かの選択を迫られる。冷酷極まりない仕打ちだ。人権侵害ではないか。

国や福島県は、避難指示区域外は放射線量も低く、

「避難する状況にない」と暴言。避難者を早く消し去り、原発事故はなかったことにしようとする。政府はインドなどへの原発輸出のために、帰還を促し、「事故が起きて大丈夫」としたいのだ。



政府は東京電力の救済と原発の延命のために、国民に電気代を通して費用を負担させる。高速増殖原型炉「もんじゅ」は廃炉としたが、核燃料サイクルは実現をめざすという。原発回帰の政策が続けば、未来の世代にさらに大きなツケが回ってしまう。

原発回帰が続けば未来の世代に大きなツケ

原発が動かなくても電力は足りている。大津地裁は高浜3、4号機の運転を差し止める仮処分を出した。ドイツは福島事故後、老朽原発を停止。残る原発も22年までに廃炉にすることを決めた。ベルギーとスイスも全廃する。日本からの原発輸出が予定されていたベトナムは計画を撤回した。台湾は脱原発法を制定した。米国ニューヨーク近郊の原子炉は閉鎖される。

政府や電力会社は原発事故の検証を行い、責任を明らかにすべきだ。世間は原発事故の真相は究明されていないのに、原発事故への関心を失い、ほとんど忘れてしまっている。メディアがあまり報道しないこともあって、事故は風化している。

原発事故は終わっていないのだ。阪神大震災、東日本大震災、熊本地震と続く日本列島。決して他人事ではない。フクシマを忘れてはいけない。

「差別と人権」研を総括

「依存症」問題への理解を深めた記念講演

昨年9月開催の第8回「差別と人権」研究集会についての総括会議が2月3日、田原本青垣生涯学習センターであつた(=写真)。

集会実行委員会加盟の関係市町村



の代表や、本法人理事が出席。研究集会を振り返り、その成果と課題を整理した。

植村照子・実行委員長があいさつ。研究集会への感謝の意を述べ、次回開催に向けた総括討議を呼びかけた。香川明英・事務局長が研究集会の参加状況、記念講演、第1・第2分散会、全体会での討議などについて報告。また、収支決算、当日実施したアンケートの結果を報告した。

記念講演は「依存症は回復できる。奈良から全国へ発信11年」をテーマに矢澤祐史・(社)GARDEN理事長に話をしてもらった。「依存症」問題については、第4回研究集会の分散会でも報告を受け、議論している。今回、改めて「依存症」とは何か。なぜ「依存症」になるのか、を理解し、「依存症」は回復できるということの認識を深めることができた。

第1分散会のテーマ「子どもの貧困にこだわり、地域の社会資源と結びつけて支援のあり方を探ろう」は、「子ども食堂」の動きが各市町村で始まっていることから、何が課題なのかが見え、関心が高かった。地域での立ち上げの様子なども語られ、取り組みが徐々に進んでいることが分かった。

また、支援の関係づくりの困難さや、個人情報の取り扱いを巡っての情報共有の難しさを感じていることや、教育現場では、これまで子どもや親を個々に支えて対応してきたが、「子どもの貧困」問題については、「貧困」という概念がなく、実践もないため、ピンとこない現実があることから、スクールソーシャルワーカーの

役割の大切さや課題が報告され、議論できた。

第2分散会では、県断酒連合会の新井和彦・会長が「アルコール健康障害対策推進基本計画」、ワンネスグループの三宅隆之・副代表が「県内自助組織による依存症回復支援」について提起。それを受けて、体験者4人が自らの心の葛藤や挫折経験を語り、参加者から質問や「共感」が語られ、意見交換できた。総括内容は次回「研究集会」に繋げたいと集約した。

「智異山」「太白山脈」を学習

韓国の大河小説である『智異山(チリサン)』(李炳注=イビョンジュ・東方出版)と『太白山脈(テベクサンメク)』(趙廷来=チョジョネ・集英社)を読む学習会が12月17日、大阪であった。学習会は1月9日付「大阪日日新聞」に取り上げられた(=写真)。

植民地支配の抵抗と解放後の韓国民衆を描いた両作品はパルチザン闘争が共通のテーマ。韓国民主主義の分水嶺とされる87年民主化闘争以降、両作品は多くの人に読み継がれ、韓国ではベストセラーとなっている。日本人に朝鮮との関係を問いかける作品でもある。



学習会のパネラーは、吉野喜政さん(元毎日新聞ソウル特派員)、伸俊雨さん(文学研究者)、松田暢裕さん(「智異山」翻訳者)。司会は川瀬俊治さん(ジャーナリスト)。吉野さんは、ソウル特派員時代の経験や、現在の韓国での「政治腐敗と抗議デモ」に触れて、話をした。伸さんは二つの作品を比較し、紹介。松田さんは著者の足跡を紹介し、作品に描かれた思想的な背景を話した。それぞれの話は興味深かった。

この2作品は韓国・朝鮮の「この時代」と向き合い、この時代を生きた人たちと出会うためにも、じっくり読んでみたい「大河小説」である。

子どもの里の夜回りに参加

31年続く野宿者への声掛け活動

大阪・釜ヶ崎にある「子どもの里」(写真)が取り組む「子ども夜回り」に1月28日、参加した。「子ども夜回り」は1983年に横浜・山下公園で起きた「路上生活者が少年らに襲撃され死亡した事件」をきっかけに始まる。現在、31年目という。毎年、1月中旬から3月初めの土曜日に実施している。



昨年11月3日、奈良で開いた講演会に「子どもの里」代表の荘保共子さんに来てもらった。そのとき伺った話がきっかけで、この日、喜多学志さん・廣田英行さん(ひまわり)、宇陀直紀さん(奈良人材育成協会・引きこもり、不登校支援者)と参加した。

リヤカーに毛布、カイロ、おにぎりを積んで

事前の「学習会」が午後8時から始まった。この日は「釜ヶ崎のおじさんはどこからきたか」がテーマ。1960年代、70年代と現在の姿をパネルや写真で紹介しながら、街が変わっていく様子(人々の生活や仕事)と、「家族が周辺に追いやられ、単身者のまちへ」「高齢化が進んでいる」ことなどが話された。「えっとう・よまわりガイドブック キリスト教協友会」が資料として配られる。参加者は小学1年生から高校生までの子どもたち10数人、スタッフ8人、大学生と教員7人、個人やグループ参加15人。NHKの取材チームも同行した。

午後9時過ぎから、釜ヶ崎2グループ(A=センター周辺・シェルター、B=山王・恵美須町)、日本橋・なんば・心齋橋・本町、天王寺などのチームに分かれて夜回りに出た。リヤカーに毛布、カイロ、おにぎり、みそ汁などを積み込み、出発した。

私と喜多さんは釜ヶ崎Aチームに。三角公園、あいりんセンター、ジャンジャン横丁、通天閣、新世界市

場、阪堺線恵美須町駅(ちんちん電車)を回った。

三角公園で3人、センター周辺で20人ほどが野宿していた。シェルター(宿泊可能な施設・無料)ができたことや、高齢化の進行、仕事の減少などで、野宿者が減っている、と学習会で聞いた。

「おっちゃん心配やから参加したい」

子どもたちやスタッフは一人一人に声を掛けていく。「おっちゃん、寒ない? どこか痛いとかないか? みそ汁とおにぎりあるで!」。絶妙の声掛けに驚かされる。小学1年生のS君はNHKの取材チームのインタビューにも動じない。「いつもは無理やけど、おっちゃんが心配やから夜回りに参加したい。元気になってほしい」。



野宿者の中には野宿の準備もなく、センターの柱にもたれて腰を下ろす人もいる。渡したみそ汁とおにぎりを口に、「おいしいわ」。毛布やカイロなどとともに、「病気や生活のことで相談のある人たちへ」と書かれたチラシを渡す。チラシには、医療センターや労働福祉センターの利用案内や、炊き出し、シェルターの利用方法なども紹介している。

各チームが出会った野宿者は141人

話好きの人もいる。昔話や、「トランプ大統領への不安」を口にすることも。時事ネタ通で、情報は新聞やラジオから、とのこと。最後に回った恵美須町駅構内には、終電も終わり、10人ほどが野宿していた。

子どもの里に戻り、各自、感想を書く。そのあと、「報告会」。この日、出会った野宿者は141人。シェルターを利用した人は311人と報告された。

これまで何度か「越冬の支援」などで参加したことがある。だが、子どもたちとの夜回りは初めてだった。今回、子どもたちをはじめ、多くの人たちと出会えた。感謝です。次回2月25日にも参加しようと思う。

映画「真白の恋」を上映

「ひまわりの家」が呼びかけ

社会福祉法人「ひまわりの家」は1月19日、三宅町のあざさ苑で映画「真白の恋」上映会を催した。近隣の障害者施設・事業所にも呼びかけ、多くのメンバーや職員で会場はいっぱいとなった。ひまわりの渡辺哲久さんに続き、坂本欣弘・監督があいさつした。



この映画は2016年の「第4回なら国際映画祭」で上映され、来場の観客から最多得票を獲得した作品に贈られる「観客賞」を受賞している。

物語は、富山の海辺の町氷見を舞台に、家族と暮らす主人公・渋谷真白。父の営む自転車店の店番をしたり、犬の世話しながら毎日元気に過ごす。彼女には、軽度の「知的障害」がある。ある日、兄の結婚式が行われる神社で、東京からやってきたカメラマンの油井景一と出会う。少しの間、カメラを預けられた彼女は、うっかりシャッターを切ってしまう。その時に偶然撮ら

編集後記 ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ポスト真実(post-truth)」の時代だという。英国のEU離脱と米大統領選を反映し、時代を最もよく表す言葉とされる。真実や事実よりも個人の感情や信念が重視される米英の政治文化や風潮を表現する。要するに「デマ」や「虚偽」情報による感情的な訴えかけの方が世論形成に大きく影響する状況を意味する。日本でも多用される。「駆け付け警護」で問題の南スーダン。「戦闘」を「衝突」と言い換える。「沖縄の基地負担軽減」と称して「辺野古新基地」を建設する。消費増税再延期での「約束」違反を「新しい判断」と言う、などだ。真実や言葉を軽視する政治は危険な結果を招く。

れた写真に、油井は不思議な魅力を感じる。それをきっかけに二人の縁が広がり、真白は生まれて初めての恋心を抱くようになる。

話の筋立てでもよく、真白の心の揺れや葛藤、家族や取り巻く人たちの「戸惑いや動揺」などが、町中のさりげない景色や冬の立山、雪に覆われた海岸などの印象的な映像に溶け込む。いつの間にか、「はらはら、ドキドキ」しながら、映画に見入っていた。

上映後は、監督を交え、メンバーからの感想などが述べられ、「さわやかな」笑顔が広がった。

みんな笑顔☆子どもの居場所 映画会

■映画「さとにきたらええやん」

3月19日(日)午前9:30開場・10:00開演、川西文化会館コスモスホール

日雇い労働者の町、釜ヶ崎にある「子どもの里」の活動を追ったドキュメント映画。100分。



■映画「みんなの学校」

3月19日(日)午後12:30開場・13:00開演、川西文化会館コスモスホール

「地域に開かれた学校」、大阪市立大空小学校(住吉区)。特別支援対象の子どもたちも多く、すべての子どもたちが同じ教室で学ぶ。106分。迫川さんによるトークショーも。無料。入場整理券が必要。主催は川西町・川西町LD研究会。問い合わせは0743-20-0035 (LD研究会・松村)。



ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター
〒636-0223
奈良県磯城郡田原本町鍵301-1
TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833
E-mail: info@nponara.or.jp
http://www.nponara.or.jp/